

選択肢提示における家族対応のあり方に関する研究

研究分担者 渥美 生弘 聖隷浜松病院救命救急センター 副センター長

研究要旨：

救急患者の病状が落ち着く前、超急性期のうちからMSWが介入することについてディスカッションするための動画を作成した。

また、臓器提供の経験が少ない施設において、臓器提供が行われる際に現場のスタッフが参考にできるマニュアルの作成をすすめている。

A. 研究目的

救急・集中治療における終末期医療では患者の意思に沿った治療を選択することが推奨されている。しかし、救急医療の現場では治療が優先され、患者・家族と十分なコミュニケーションを取って治療方針を決定できていないことも少なくない。特に臓器提供に関しては患者の意思を患者家族と共に考える時間が必要である。医師、看護師のみでなくMSW(Medical social worker)等が来院早期から関与することを検討する。

臓器提供の経験がない、又は少ない施設は、臓器提供を行う事に不安を抱えている。提供に関わるスタッフは自身が何をすべきか不明確であることが多い。そのような施設で臓器提供の際に参考となるマニュアルを作成する。

B. 研究方法

救急患者に来院早期からMSWが関与する体制について議論するため、そのきっかけとなる動画を作成した。動画の作成には医師、看護師、MSW、移植コーディネーター、模擬患者、が参加した。

臓器提供の経験が豊富な研究協力者と共に、マニュアルに含む項目を選定し、分担を決めて原稿を作成した。

C. 研究結果

慢性心不全急性増悪患者における家族の治療参加のシナリオ、脳出血による遷延性意識障害患者の気管切開に関する意思決定のシナリオ、脳出血後脳死に至った症例において臓器提供を考えるシナリオ、の3つの動画を作成した。

マニュアルは、研究協力者が作成した原稿に統一性を計るよう校正作業を行っている。

D. 考察

多職種の参加者と共に話し合いを繰り返し動画のシナリオを作成した。作成過程において、現在は看護師が家族対応を行っているにもかかわらずMSWが介入する必要があるのか、MSWがこのタイミングで家族に対応するのは不自然であるなどの意見が出た。

しかし、どんな職種でも良いが家族に寄り添う立場のスタッフの存在は必要であるという共通認識に至った。

また、動画を使ったワークショップでは、急性期からMSWが関与してくれると助かる、医療とは別の窓口で家族の話の聞くことができるのは有用であるとの意見が聞かれた。

マニュアルに関しては現在校正作業をすすめているが、臓器提供の体制に関しては施設によって関与する人員の数、部署の数、施設スタッフの考え方、などに大きな差があるため多くの施設の方々に意見を頂きながら最終版にしていく必要があると考えている。

E. 結論

救急患者・家族に対し超急性期からMSWが関与する体制について議論するための動画を作成した。MSWが早期から関与することに違和感を持つ方も多いが、好意的な意見も多かった。

臓器提供を行う施設のスタッフが参考にできるマニュアルの作成をすすめている。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし